

## 《卒業研究報告》

## 社会を変える可能性を求めて

## ー 〈体験者〉と〈非体験者〉のあいだで生きるー

松永 優佳（竹峰ゼミ）

## 序章

## 第1節：体験者の語り

「私がカミングアウトして、（学校で）異性愛しか対象としていない教科書に突っ込むことで、（トランスジェンダーに対して）否定的な場面にあったとき、『気持ち悪くない？』とかになったら、私がよぎればいいなって思う。『私の中学にトランスジェンダーの先生いたよ』とか」<sup>1</sup>。そう語ってくれたのは、愛知県で中学校の教員をしている浦田幸奈さんだ。

浦田さんは生まれたときに割り当てられた性別が男性、性自認が女性のトランスジェンダーである。元々自身の性自認を隠して男性として生活していた。しかし性自認と異なる性別として生活することに困難を感じ、受け持っているクラスでカミングアウトをしたことをきっかけに、その後他の教職員にもカミングアウトをした。浦田さんは自身の存在や体験を語ることで、セクシュアルマイノリティが身近にいることを知ってもらおうとしている。

浦田さんは、特定非営利活動法人<sup>アスタ</sup>ASTAという団体に所属し、語ることを続けている。ASTAはホームページで「当事者との交流を通して『大切なのは性別や国籍、身体的特徴などではなく、人格や人柄であること』を伝え、考え、理解を深める機会を提供していきます」（特定非営利法人

ASTA、2023）とうたう。ASTAはセクシュアルマイノリティ当事者やその親をスタッフに迎え、かれらの体験を聞くことができる場を作っている。セクシュアルマイノリティ当事者から実際に体験したことや直面した困難を聞くことで、そもそもないものとされている不可視化されたセクシュアルマイノリティの存在を可視化し、現状を改善することを目指しているのだ。

セクシュアルマイノリティ当事者が自身の経験を話して社会を変えていこうとする動きは他にもある。「結婚の自由をすべての人に」と2019年から全国5か所で一斉に提訴された訴訟でも、セクシュアルマイノリティ当事者が立ち上がって原告となり、自らの体験をもとに同性婚の必要性を、裁判官のみならず世の中に訴えた。

この集団訴訟の目的は、同性婚が認められないことによる不都合を自らの体験を通じて具体的に裁判官に伝え、改善を求める判決を引き出すこと、そして報道を通じて広く世論にも状況を知ってもらうことである。「結婚の自由をすべての人に」訴訟では、同性婚が認められないことが、法の下での平等を定めた憲法14条と、婚姻の自由の保障と個人の尊厳を定めた憲法24条に違反するかどうかが争われた。

2022年11月30日東京地裁は、同性婚を国が認めず、同性愛者が望む人と結婚できない状態は、個

1. 2021年7月3日、浦田幸奈さんが、特定非営利法人ASTAが石川県金沢市で行った「【出張授業】LGBTQ+出張授業IN金沢」にて、述べられたものである。

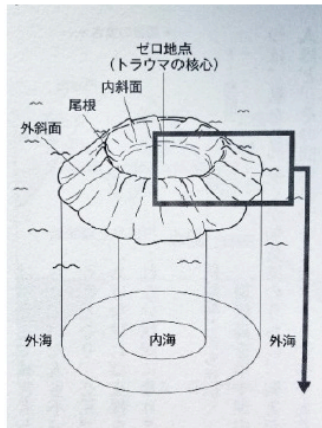


図1 環状島モデルの構造

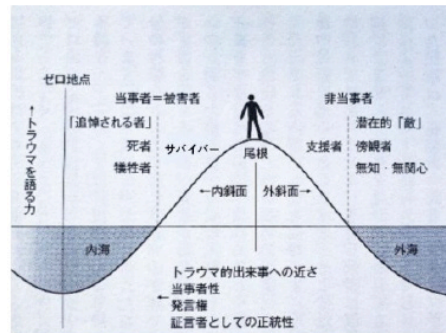


図2 環状島モデルの断面図

(宮地尚子、2011、『震災トラウマと復興ストレス』岩波ブックレットより、一部筆者改変)

人の尊厳を規定した憲法24条2項に反するもので、違憲状態であるとの判決を出した。同性婚を国が認め、パートナーシップ証明制度<sup>2</sup>などのような「制度を構築することは、その同性間の人的結合関係を強め、その中で養育される子も含めた共同生活の安定に資するものであり、これは、社会的基盤を強化させ、異性愛者も含めた社会全体の安定につながる」（東京地方裁判所、判決要旨、2022年11月30日）と、同性婚を認める必要性が東京地裁判決で述べられた。注目したいのは、裁判の結果とともに、実際に女性同士で子育てをしている原告の意見陳述が、地裁判決で直接反映されたことである。同性婚を認めることは同性婚を求める当事者だけでなく、よりよい社会を築くことになるとの見解を、当事者の訴えを基に東京地裁が示したのだ。「結婚の自由をすべての人に」訴訟が象徴的に示すように、実際に生活のなかで困った体験をした人の語りは状況を変える力を持っている。

浦田さんや「結婚の自由をすべての人に」訴訟の原告のような、実際に困ったり苦しんだりした

経験がある人の存在と、かれらが語る意義は、宮地尚子が提唱した環状島モデルを用いて次のように説明できよう。以下の図は、宮地の著書内の図を一部改変したものである。図1のように真ん中に〈内海〉があり、海から出ている陸地がドーナツ状になっている。図2のように「〈内海〉は犠牲者や、かろうじて生き延びたけれど声を出す余力のない人たちがいる沈黙の場所」（宮地 2011:8）である。浦田さんや「結婚の自由をすべての人に」訴訟の原告は、〈内海〉から〈内斜面〉に上がり声を上げたサバイバーにあたる。〈内海〉から〈内斜面〉にいる人たちを、体験者と本論文は呼ぶ。

体験者が語ることは、支援者にあたる〈外斜面〉にいる人や、傍観者や無関心な人にあたる〈外海〉にいる人に、不可視化されている自分たちの存在を知らせ、何が問題なのか、その実態を伝える意義を持っている。

## 第2節：体験者の声をどう聴くのか

社会を変え、状況を改善しようというとき、〈内斜面〉にいる体験者の語りが重要であること言う

2. 自治体が同性カップル等に対し、結婚に相当する関係であるという証明書を発行する制度。それにより、その自治体においては結婚している異性カップルと同様であるということなどが目的。

までもない。しかし、体験者が語るだけで、状況は改善したり、社会は変わっていったりするのだろうか。〈外海〉にいる人たちは体験者の声をどう受け止めているのだろうか。LGBT法連合会事務局長の神谷悠一は著書の中で、「配慮したいと思います」「思いやりを持つようになったらいいなと思いました」など大学の授業のコメント等に首をかしげることがあると紹介している（神谷2022:19）。セクシュアルマイノリティもそうだが、性差別や障がい者、移民、さらには被爆者や戦争体験者の語りに対して、〈外海〉にいる人は、「かわいそう」「がんばって」という受け止め方で終わることは決して少なくない。

同情や励ましは善意の発言、あるいは無意識の反応なのだろう。しかし「かわいそう」や「がんばって」の言葉は、体験者との関係性を見えにくくし、体験者が抱える問題の解決を、体験者にもつぱら押し付けることになってはいないだろうか。

さらには、〈内斜面〉で声を上げはじめている人を、〈内海〉に引きずり込むような発言が、〈外海〉から発せられることもある。例えば、2023年6月、「結婚の自由をすべての人に」訴訟の福岡地裁を報じた福岡・佐賀KBC NEWSのYouTube動画に対して、次のようなコメントが寄せられた。「国の制度で保護する義務とかないわ、勝手に楽しんでろということだけのこと」、「図に乗りすぎ」、「他人とは違う生き方を選んだのは貴方達なのに、普通の人と同じ様に扱ってはムシが良すぎるんじゃないですかね？」（福岡・佐賀KBC NEWS、2023）。体験者が語ることに對して嫌悪感を覚えてたり、攻撃的になったり、否定的になるコメントが散見される。

体験者が発する声に対して、〈外海〉にいる人が上記のような発言をすることは、体験者を攻撃し、社会を変える可能性を排除する行為ではないだろうか。〈内斜面〉にいる人たちは、最初から声を上げられていたわけではない。〈内海〉から

抜け出して〈内斜面〉に上がって声を出している。必ずしも体験者ではない〈外海〉にいる者は、社会問題に直面する体験者の声を「当たり前」のこととして、もっぱら聞き役にまわるだけでいいのだろうか。

体験者が語る体験を体験者に固有の特殊な問題としてではなく、社会の問題にして、社会を変えていくためには、体験者だけでなく、環状島モデルの〈外海〉にいる人たち、すなわち体験者ではない人たちの役割が決定的に重要になってくるのではないだろうか。

### 第3節：体験者ではない人がもつ可能性

もともと〈外海〉にいた人たちのなかで、〈外海〉から〈外斜面〉を登り、さらに〈尾根〉を越えて体験者に近付こうとしている人がいる。例えば、セクシュアルマイノリティではないが弁護士という立場で同性愛者の権利を守る裁判に奮闘している人がいる。母親のお腹のなかで被爆した胎児被爆者のなかで、知的障害がある原爆小頭症の方のことを知ってもらおうと支援しながらドキュメンタリーを撮った人もいる。そのような、必ずしも体験者ではないが、社会問題と深く関わって現状を改善しようと活動している人たちに、この論文は注目していく。

2022年の夏ごろから「結婚の自由をすべての人に」訴訟の裁判の様子を追い、参与観察やインタビューを通じて、原告の方の語りや、体験者ではない弁護士の熱意に触れた。また、2022年に1回、2023年に2回広島を訪れ、原爆投下の直接の体験者がいなくなろうとしている広島の現状と、体験者ではないが広島のことを伝えようとしている人々と交流を重ねながら、参与観察やインタビューを行った。そのようなフィールドワークのなかで出会った、必ずしも体験者ではないが社会問題と深く関わって現状を改善しようと活動している3人に対する半構造化インタビューを重ねた。

必ずしも体験者とはいえないかれらは、体験者の声とどう出会い、聴き、深く関わるに至ったのか、その道筋を本論は浮き彫りにしていく。そのことを通じて、必ずしも体験者ではない人たちが、体験者の語りを聴いたり、学ぶだけで終わらず、〈外斜面〉を登ったり水面を下げようとしたりして、より主体的に社会を変えていくためにはどんなことが出来るのかを明らかにしていくことが、本論文の目的である。〈外海〉にいる人びとが、社会問題に直面する体験者の語りを聴くこと、あるいは学ぶことは重要であるが、そこから先にどんなことが出来るのかを構想していく手がかりを、この論文では求めていく。

第1章は、東京都新宿区の諏訪の森法律事務所の中川重徳さんである。中川さんは、宿泊施設がレズビアンとゲイの団体の利用を拒否したことの不当性を訴えた、「府中青年の家」事件で原告側の弁護を担当していた。中川さん自身はセクシュアルマイノリティ当事者ではない。しかし主に訴訟という形で、同性愛者に対する差別や偏見、不平等を改善する活動をしている。

第2章は、広島県竹原市にある大久野島で、毒ガスにまつわる遺跡案内や講和をしている、「大久野島から平和と環境を考える会」代表の山内正之さんである。山内さんは毒ガスの製造に関わっていたわけではなく、毒ガスの被害にも直接あったわけではない。しかし毒ガス被害者のもとに調査に赴いたり、大久野島の遺跡案内や講和を長年務めていたり、精力的に活動をしている。

第3章は原爆小頭症被爆者と家族の会である「きのこ会」の事務局長を務めている平尾直政さんである。平尾さんは原子爆弾による被爆をしておらず、体験者ではない。原爆小頭症のことを書籍で偶然知ったことをきっかけに、報道カメラマンと

して関わり始めた。記録者と支援者という2つの立場を自覚しながら、現在では大学院に通い、原爆小頭症の人たちのことを記録に残す活動をしている。

以上の3人の〈外海〉から〈外斜面〉に上がり、〈内斜面〉の声を聴きながら〈尾根〉に向かって登っていく実践を追い、かれらがどのように社会を変えようとしてきたのか、その過程を第1章から第3章にかけてみていく。そのうえで、かれらは体験者の声をどのように聴き、どのような役割を担ってきたかを終章で導き、必ずしも体験者ではない人が、問題を知った先で社会を変えていくために出来ることは何かを考察し、結論を導いていく。

## 第1章：体験者と共に活動する喜び

### 第1節：友人からのカミングアウト

自分と縁がある「地続きの人たちが、問題とか困難にぶち当たってるときに、じゃあ自分は何を頑張れるの？」っていう。頑張れないより頑張れた方が、語弊を恐れずに言うと、自分自身がハッピーになんじゃないかって思う」<sup>3</sup>。そう話してくれた弁護士の中川重徳さんが、同性愛者を取り巻く問題に関わり始めたのは偶然のことだった。

中川さんは、同性愛者の団体「アカー」（旧「動くゲイとレズビアンのかい」）とその3人のメンバーに対して「東京都教育委員会が、都立「府中青年の家」の宿泊利用申込を不承認とした処分を違法とし損害賠償を求める裁判」（谷口 2019：1）、通称「府中青年の家」裁判に原告代理人として関わった。現在では、序章で紹介した「結婚の自由をすべての人に」訴訟にも東京弁護団の一人として関わっている。

中川さんがいる事務所は、東京都新宿区の高田馬場駅から、歩いて3分ほどの場所にある。あま

3. 2023年11月6日、中川重徳さん、東京都新宿区、諏訪の森法律事務所にてインタビュー。以下、中川さんへのインタビューは同日に行ったものである。



り人通りの多くない戸山改札口を出てから少し歩いて、郵便局や点字図書館を抜けた先に、諏訪の森法律事務所はあった。

インターホンを押して少し待つと、スタッフの方が出迎えてくれた。事務所に入ってすぐ、セクシュアルマイノリティや被爆者に関わる本が所狭しと並んでいるのが目に入る。それらを眺めながら待っていると、「お待ちせしました」とボロシャツ姿の中川さんが現れた。「弁護士」にお堅いイメージを持っていた私は、スーツではない中川さんに驚きながらも、緊張が少し和らいだ。

中川さんは、「府中青年の家」事件をはじめとして、セクシュアルマイノリティの方への法的なサポートに力を注いでいる。しかし決して、初めからセクシュアルマイノリティを取り巻く問題に関心があったわけではない。

弁護士になった1988年ごろを振り返り、「セクシュアルマイノリティの皆さんの人権の問題っていうのは、本当に何も知らなくて。それが問題なんだっていうこと自体も全く知らなかったですね」と中川さんは語ってくれた。中川さんが学生だった1970年代は今以上にセクシュアルマイノリティの存在は一般的ではなかった。男子校だった中学、高校では、優しい雰囲気の振舞いだった男子生徒に対し、ホモやオカマという言葉で騒がてるようなこともあったという。

しかし、中川さんが弁護士になった1988年の秋ごろのある日、大学の同級生と3人で飲んでいたときだった。そのうちの一人であったナガノさんが「実は自分はゲイなんだ」と打ち明けてくれた。「高校のときも誰にも言えなかったし、大学のときも（中川さんと）腹を割って話すような友達関係だったけど、その中でもやっぱり誰にも言えなかった」とナガノさんは心のうちを語った。「社会人になっても悩んでいたが、現在は社会を変えていこうとするレズビアン・ゲイの若い人たちと出会い、頑張って活動しているんだ、っていう話

をしてくれた」と中川さんは振り返る。

ナガノさんがそのときに話していた、「レズビアン・ゲイの若い人たち」のグループが「アカー」だったのだ。「アカー」は、当時10代から20代ぐらいのレズビアン・ゲイの当事者同士が繋がるネットワークを作って、社会に働きかけていた。「差別とか偏見とかを持っている社会の方がおかしいんだから、自分たちはおかしくないんだっていうことを大事にして社会を変えていこう」と行動していたグループだ。

ナガノさんからカミングアウトを受けて1年が経とうとする頃、中川さんにナガノさんのもとに電話があった。「実は今大変なことが起きているんだ」、「府中青年の家っていうところで宿舎をしていたら、他の団体から嫌がらせを受けた」、「それに対してちゃんと対応するようにしてください、っていう申し入れを（青年の家に）したら、逆に今後（青年の家が私たちを）使わせないっていう話になった」という内容だった。電話の翌日、ナガノさんは早速「アカー」の他のメンバーと共に事務所にやってきた。中川さんが話を聞いたその出来事が、「府中青年の家」事件だった。中川さんは話を聞いてから、7年間、1997年まで「府中青年の家」事件に弁護士という形で関わり続けることとなったのだ。

ナガノさんを含む「アカー」のメンバーは、環状島モデルに例えると、〈内斜面〉に位置しているといえる。社会に向けて声を上げつつ、ナガノさんのように同じセクシュアリティを持つ仲間と連帯している。一方で中川さんは、ナガノさんからカミングアウトを受けるまで、セクシュアルマイノリティを取り巻く人権問題の存在を知らなかった。中川さんは〈外海〉のなかでも、陸地の見えない沖の方にいたといえる。最初は自分から積極的に関わり始めたわけではない。しかし、ナガノさんから相談を受けたことをきっかけに、セクシュアルマイノリティを取り巻く問題にのめり

込んでいくようになったのだ。〈外海〉の沖の方面の中川さんは、突然ナガノさんから縄を投げ入れられ、よく分からないまま掴んだ。そしてあれよあれよという間に波打ち際へと引き寄せられ、〈外斜面〉に打ち上げられていたのだ。

## 第2節：体験者の魅力に触れて

ナガノさんからのカミングアウトをきっかけに、偶然〈外斜面〉に立たされた中川さんだったが、様々な出来事を通して、自分の意志で〈外斜面〉を登り始めることになる。なぜ中川さんは、そのまま〈外海〉に戻ることはせず、〈外斜面〉を登ったのだろうか。体験者である「アカー」のメンバーとともに活動するなかで感じたことが、大きな原動力となった。

セクシュアルマイノリティのことを自ら学び始めて、「世間のほとんどの人がセクシュアルマイノリティのことを何も知らないなかで、生まれてすぐからそういう偏見っていうか差別っていうか、否定のメッセージをシャワーのように浴びながら、孤立させられてなかなか相談できないでいる」という事実、中川さんは驚きを覚えた。「気持ち悪いだとか変態だとかっていうことが全然許されて当たり前って大人の皆が思っている」という状態を、「ショッキングで、やっぱりこれは何とかしなきゃいけない」と感じたのだ。

中川さんは当時を振り返って、そのときの「何とかしなきゃいけない」という感情を、「弁護士としての単純な正義感」と表現していた。「弁護士としての単純な正義感」で取り組み始めてから、自分の甘さを思い知らされることがあった。

1970年代だった当時、心理学や精神医学の世界では同性愛は精神疾患ではない、ということが既に共通認識になっていた。そのことを知った中川さんは、「そういう正しいことをちゃんと東京都教育委員会の人たちに突きつけられ、さすがに（同性愛者の宿泊施設の利用を）不許可にはできない

んじゃないか」と思ったという。そして東京都教育委員会に請願を出し、議論してもらうことにした。

中川さんや「アカー」側は当事者による意見陳述を希望していたが、代理人である中川さんの意見陳述しか認められず、議論も非公開で行われた。そのときは「むしろ、じゃあ自分がもう頑張るんだって思って、頑張ればなんとかなるんだみたいな意識があった」と中川さんは、苦笑しながら思い返していた。

しかし結果は不許可だった。「結構もう、体の力が抜けちゃってシャキッと立てないみたいな」、「割と甘く考えてたのが現実にあちが当たってペちゃんこにされたみたいな体験」だった。「弁護士としての単純な正義感」が打ち砕かれた。

しかしショックを受けている中川さんに対して、「アカー」のメンバーの一人はこう言い放った。「中川さん、社会はこういうもんなんです。僕ら絶対これに負けませんから」。さらには「あんたら覚えてろ」、「絶対に俺たちはこれで納得しないから」と、「アカー」のメンバーは、青年の家を管理する東京都の役人を睨みつけた。不許可という結果だったにも関わらず腹が据わったメンバーを目の前にして、「弁護士としての単純な正義感で、正しいことを突きつけられ、やつつけられるだろうという風に甘く考えていたのが、そんなもんじゃない」と中川さんは思い知らされた。「本当に自分はお気楽に考えてた」と気付くと同時に、「こいつらすごいな」と感じた、中川さんは嬉しそうに語ってくれた。

その後「府中青年の家」事件は裁判に発展し、最終的には、事件発生から7年の月日を経て、中川さんや「アカー」側が勝つことが出来た。裁判を進めていくなかで、若いメンバーたちが頑張っていたことも、中川さんがセクシュアルマイノリティの人権問題にのめり込んでいったひとつの理由だった。例えば、出版社に働きかけをして『広

辞苑』や『イミダス』などで、セクシュアルマイノリティに関する用語辞典の記載の改訂を行うなどの活動もなされていた。

中川さんは、自身のことを「セクシュアリティという面ではマジョリティというか、置かれている立場も全然違う」と、体験者ではないとはっきり明言する。しかし、体験者である「アカー」のメンバーらの魅力や、若い人たちの力で社会が変わっていくところを間近で見て、「腹が据わっているところ」や「いろいろ創意工夫して働きかけながら（社会を）変えていく」ところに惹かれていったのだ。

また、「憲法の教科書に載っていないような新しい人権が、日本のなかで切り拓かれて獲得されていく。それに関わる楽しさ、面白さっていうか充実感っていうのはすごくありました」と、中川さんはどこか懐かしむように思い返していた。

中川さんは弁護士として〈外斜面〉のふもとに立ちながら、〈内斜面〉にいた「アカー」のメンバーと関わっていくなかで、自らの意志で〈外斜面〉に登り始めたのだ。それはただ苦しい行為ではなく、〈内斜面〉の人たちと協同することをつうじて、かれらの生き様に触れ、新たな人権を築いていける魅力に惹かれたから、〈外斜面〉を登ることを選択したのだ。

### 第3節：アメリカで出会った仲間

中川さんがセクシュアルマイノリティの人権問題に関わる原動力として語ってくれたことがもうひとつある。「府中青年の家」事件の裁判中、調査のために2回ほど訪れたアメリカでの出来事だ。現地のレズビアン・ゲイのコミュニティの人たちに力を借りながら、自治体の政策や教育委員会の差別偏見を無くすためのプログラムを見学したり、証人候補を探したりしていた。

そのときに現地の弁護士の方と話をする機会があり、とても嬉しかったと中川さんは語る。もと

もと日本の「弁護士の繋がりのなかでは、『すごい珍しい事件をやってるよね』っていう感じで。それが勝てる裁判で、どうやったら勝つんだっていう議論になかなかならな」かったそうだ。しかしアメリカで、「レズビアン・ゲイの問題やLGBTの人たちの人権問題を日々闘ってる弁護士」と話すことが出来たのだ。「こういう風にやったら日本ではどうなるとか、いろいろ質問してくるし、いろんなアイデアについてお互い話ができた」と振り返る。「たしかに今日本の中で、セクシュアルマイノリティの人権の裁判でただ一つの初めての裁判だと思う。全部1からやらなくちゃいけない辛さとかしんどさってあると思うけど、あなたがやっていることは、10年前に自分たちがやってたのと全く同じだ」と、セクシュアルマイノリティの問題に取り組むアメリカの弁護士は、中川さんを励ましてくれたそうだ。

中川さんはアメリカを訪れて、たくさん裁判が行われていることに驚いたが、アメリカも初めからそうだったわけではない。中川さんは当時のアメリカについて、「最初は裁判なんてなかなかできなくて、もしできても負けて。でも本当にいろんな人たちが裁判で立ち上がって、勝ったり負けたりしながらだんだんと勝つことが多くなっていった。そしてそれが1つの大きな流れになってね。でもまだ実現していないこともたくさんあって、みんなで頑張っているんだ」ということに気が付いた。そして現地の弁護士の方が、「そういうなかで法律家もたくさん関心を持つ人が増えてきているんだよ。だから全然同じなんだ」と言って励ましてくれたことが、弁護士として忘れられない経験だと、中川さんはしみじみと語ってくれた。

日本国内では、「府中青年の家」事件裁判に関わっている弁護士以外からは理解されず相手にされなかった。しかし、アメリカという離れた地で、中川さんらの取り組みに共感し、励ましてくれる

人がいたのだ。「置かれている状況とか立場は違うんだけど、それぞれ一生懸命頑張ることで繋がれるっていうんですかね。そういう実感をする場面があるっていうのが、(セクシュアルマイノリティの人権問題について)一生懸命やるようになる原動力だったのかなと思います」。

中川さんは〈外斜面〉で活動するなかで、〈外斜面〉にいる他の仲間と出会うことが出来た。同じ〈尾根〉に向けて〈外斜面〉を登っている人たちと連帯し、より〈尾根〉に近づこうとしていたのだ。

ここまで見てきたように、東京都教育委員会に請願を出したときの出来事と、アメリカでセクシュアルマイノリティの人権問題について関わっている弁護士と出会ったときの出来事によって、中川さんは〈外斜面〉を登り〈尾根〉に近づこうとしたのである。

#### 第4節：体験なくとも共有できる感情

中川さんは〈外斜面〉を登って〈尾根〉にどんどん近づいてきた人であるが、一方で自分は当事者ではないと語る。「僕はね、まあ当事者ではないですよ。ただ逆に、絶対越えられない壁があるんだっていうことについて、あんまり考えない」、「そういうことを考える前に動いてしまう性格」だと中川さんはいう。

自分たちの裁判の支援をしたり、味方をしてくれる弁護士だとしても、「全ては分かってくれてないですよ、という感覚を当事者である原告の方は持っている」と、中川さんは感じている。当事者とそうではない人のあいだには、越えられない深いものがあると考えているようだ。しかし、中川さんは体験者とそうではない者の違いや、越えられない深いものを特段重大には捉えていない。(越えられない壁があるのは)「しょうがなく。それでも、その相手の人の悲しい気持ちとか嬉しい気持ちとか、ちょっと嬉しくてワクワクし

たとかね。一緒になにか動いていたり問題に取り組んでいるなかで、嬉しい気持ちとかがこっちに伝わってくるっていう、そういう体験とか瞬間っていうのは間違いなくある」。「自分の言葉が相手に響く瞬間があったりとか、そういうことってある」と嬉しそうに中川さんは話していた。

体験者とのあいだで越えられない壁があることを自覚しつつも、ある意味で開き直り、自分が出来る事を探すのが中川さんのスタイルだ。考えるよりも動いてきた結果、たとえ体験がなくとも同じ感情を共有できる瞬間が時に訪れるのだ。

体験を持たない中川さんは、セクシュアルマイノリティの語りを「自分とは関係がない」、弁護士として「専門ではない」として切り捨てることもできた。しかし同じ時代や社会、国という共通点があったり、あるいはなにも共通点がなかったとしても、どこかで自分と繋がっている人間の問題だと感じる瞬間があるという。体験のある〈内斜面〉と、体験のない〈外斜面〉という違いはありながら、同時にそれぞれは無関係ではなく、繋がっている。

セクシュアルマイノリティの体験者の方々に「助けてあげる」とは、中川さんはインタビューのなかで一度も口にしなかった。中川さんにとって体験者とは、「かわいそう」で「助けてあげる」対象ではないからだ。「何らかの意味で地続きの人たちが、問題とか困難にぶち当たってるときに、じゃあ自分は何を頑張れるの?っていう。で、頑張れないより頑張れた方が、語弊を恐れずに言うと、自分自身がハッピーになんじやないかって思う」。「いろんな人のおかげで(弁護士として)持てている自分の資格とか力っていうのは、どうせだったらそういうことのために使いたいし、使えとそれはやっぱり自分としての喜びっていうか、充実だなあとは思ってます」と、最後に中川さんは語った。

〈外斜面〉にいる自分が体験者のために動くこ



とは、自分自身のためでもあると中川さんは考えている。〈外斜面〉と〈内斜面〉の双方にとってメリットがあると感じ、取り組んでいるのだ。裁判を通して、結果的に〈外海〉の人に対して、セクシュアルマイノリティの人権問題を可視化させ、体験者への偏見等を無くす可能性を高めることができた。それは、水面を下げ、声を出せる〈内斜面〉の体験者を増やし、同時に〈外海〉から〈外斜面〉に上がる人も増やすことに繋がるのである。

第1章では弁護士の中川さんの取り組みに注目して、〈外海〉から〈外斜面〉に上がり、そして〈尾根〉に近づいていく過程を見てきた。第2章では、遺跡案内人という立場で大久野島の毒ガス問題と関わり続けている人に注目する。

## 第2章：加害の歴史を伝えるということ

### 第1節：下宿屋での生活

「毒ガス問題だって、かつて日本は大変なことをやったと。でもあれは私の生まれる前のことであって関係ないよ、で済ませたら、それは非当事者で関係ないで外れてしまうけど、そうじゃないんですよ。日本国民である以上は、日本がやったことについては当事者なんですよ」<sup>4</sup>。そう熱弁してくれた山内正之さんは、広島県竹原市にある大久野島の平和学習に関わる遺跡案内や講和を長年されてきた元高校教師である。

広島バスセンターから高速バスに約1時間半揺られ、終点の忠海港からさらにフェリーで15分かけて海を渡ったところに大久野島はある。現在では「うさぎ島」と呼ばれ、うさぎ目当ての観光客で溢れる大久野島は、第二次世界大戦中に日本軍が使用するための毒ガスを製造していた島である。第一次世界大戦で多く使用された毒ガスは、

1925年のジュネーブ議定書で禁止されている。しかし日本は署名をしたにも関わらず製造していた。そのため、毒ガスの被害や加害、さらには大久野島で製造されていた実態まで、多くのことが日本政府によって隠されてきた。

山内さんは、大久野島がある竹原市の出身である。高等学校まで竹原市内で過ごし、関西学院大学に進学したあとは、下宿屋で生活をしていた。現在のシェアハウスに近い暮らしであり、ひとつの下宿に10人から20人がいたという。

大学時代の下宿屋での生活が、社会問題に対して意欲的に取り組むきっかけになったと山内さんは語る。「高校時代の私はね、全くね、無知だった。本当に。(大学に)入ってからね、誰に学んだかいうたらね、やっぱり下宿屋の友達なんよ」。下宿屋には麻雀ばかりやっていて単位を落とす人や、空手部の主将として空手に熱中していた人など、いろいろな人が集まっていた。その中で、ベトナム戦争や学費値上げ闘争など、そのとき注目されていた社会問題に対して、積極的に取り組んでいる人たちがいたのだ。

「やっぱりベトナム戦争は許せんと、みんなで反対の声を上げようや、言うて。で、また下宿で議論するわけよ。そういう話を聞きながら、あーやっぱり社会問題に対して、自分は今まで無知だったなあ、というのがね。結局大学で分かったね」と山内さんは懐かしんでいた。

下宿屋での生活でたくさん刺激を受け、社会問題に対してすごく関心を持つようになった。「何かの出来事があったから今の毒ガス問題に取り組んだというよりも、やっぱり社会的な問題に対して、自分は行動していかなくはいけない、みたいな価値観が僕なりにあったんよね」と振り返る。社会問題に対して、自分は参加しようという気持

4. 2023年10月2日、山内正之さん、Zoomにてインタビュー。以下、山内さんへのインタビューは同日に行ったものである。

ちを常に持っていて、それが今の活動にも繋がっているようだ。

山内さんは自身のことを、先頭に立ってみんなを引っ張って、リードしていくようなタイプではないと評価する。しかし、デモに参加するなど「自分は自分のできるところで、社会問題に対して正しいと思うことをやっていこう」と、積極的に行動することを大切にしていた。「大学で刺激を受けたり学んだり、いろんなことをやった。そのときに、社会問題に対しての目が開けていたというかね、それがひとつ大きかったと思う」と、大学時代が山内さんの原点なのだと教えてくれた。「社会問題はいろんなものがあるわけだから。そういうものに対して、自分がちょっとでもね。それをいい方向にもっていくような生き方をしたいのは、心の中にずっとあったからね。それは、大学時代のいろんな活動を通じて、自分の中に作られてきたもんだらうと思うよね」。大学時代に下宿屋で暮らしたことをきっかけに、様々な社会問題に関わり、より良くしていきたい、という山内さんの姿勢が形成されたのだ。

環状島モデルに例えると、大学に入る前の山内さんは、〈外海〉にいて島があることに気が付いていなかった。しかし、下宿屋での生活を通して、環状島があることを知り、〈外斜面〉を自ら登るようになる。それは特定のひとつの社会問題に対してではなく、いろいろな問題に対して同様であった。山内さんは、〈外斜面〉を登りながら、同時にほかの環状島の存在にも気が付き、登っていたのだ。

## 第2節：「まずは自分がやらないかん」

下宿屋での出会いを通して、様々な環状島の存在に気が付いた山内さんは、その後大久野島の毒ガス問題という環状島に焦点を定め、〈外斜面〉を登り始める。なぜ山内さんは、多くの社会問題が見えていたなかで、大久野島の毒ガス問題に熱

心に取り組んだのだろうか。大学時代の経験から社会問題への目は常に開いていた山内さんだったが、高校の社会科教員になってから「誤った歴史を教えてしまっていた」との認識を抱いたことが、大きなきっかけだったのだ。

大学卒業後、一般企業に入った山内さんは、価値観が合わずにすぐ辞めることになる。「会社員はあくまで会社の利潤追求を目的にみんな頑張って給料もらって生活するわけだからね。それも悪いとは思わないけど、自分にとってはこのまま一生を終わりたいくないなあ言うのが正直あった」と繰り返し話してくれた。

その後、山内さんは高校の社会科教員になる。「子どもの前に立って自分が語っていくことについて、すごく充実感を感じたというかね。子どもと接して、何かを伝えていく方がいいなっていう。実習したときにそれを感じたよね」と、子どもに何かを伝えることに喜びを感じたのだ。

山内さんが教員になって10年ほど経った1982年ごろ、日本の侵略戦争を否定するような動きが日本国内で出てきた。山内さんは「授業の中で、できる限り子どもたちに日本の中国侵略の事実を伝え、二度と戦争を起こす日本になってはいけないと子どもたちに教えて」（山内 2020:121）いた。しかし日本軍の毒ガス加害の歴史については、山内さんのなかの知識が誤っていたことから、授業で取りあげていなかった。

知識が誤っていた理由について、山内さんは自身が出版した本でこのように振り返っている。「小学校入学前から、誰からともなく、『戦争中、大久野島では毒ガスを製造していた。』ということを知っていました。しかし、『戦争では使わなかった。大久野島で製造した毒ガスで外国人は殺傷していない。』と聞いていたので、それを信じていました。学校で習った覚えもないので、それが当時の大久野島の存在する周辺地域の一般的な知識だったと思われます。なぜ、このような間違っ

情報が地域に広がっていたのか。国際条約に違反した毒ガスを中国などで使用したという事実を隠蔽するために流された偽情報だったのだと思わざるを得ません」(山内 2020:121)。

事実を隠蔽するために流されていた間違った情報を信じ、子どもたちに間違った歴史を教えていたことを、山内さんは猛省した。「人から得た情報をそのまま信じるのではなく、自分自身で調査研究することが必要だ」(山内 2020:121)と痛感した山内さんは、自ら積極的に大久野島の毒ガス被害・加害の事実を学ぶようになる。1996年8月に大久野島で行われた毒ガス問題のシンポジウムに参加したことを皮切りに、翌年の1997年には中国のハルビンとチチハルで中国遺棄毒ガス被害者と会い、交流を続けた。1998年からは、大久野島の毒ガスの歴史を伝えるために、大久野島の遺跡案内や講和を始めた。

活動を始めてからも、山内さんがずっと大事にしていることがある。それは、自分の足で現場に行って学ぶことだ。子どもたちに間違った歴史を教えていた経験の反省から、人づてに聞いた噂話ではなく、自分で調べていくこと大切にしてきたという。「やっぱり現場に行って、そこでいろんな人から(直接)話を聞いたり、見たり感じたりするということが大事かもわからんね」と自身の今までの学びを振り返っていた。実際に、中国や北朝鮮、アメリカ、ポーランドなどに複数回足を運んでいる山内さんは、お金や時間の工面の難しさに苦笑しながら、その時々思い出を語ってくれた。

現地に足を運び、体験者に直接会って話を聞くなかで、山内さんは「人間はね、根本的に人殺しはみんな嫌なんです。戦争は嫌なんです」ということに気が付いたという。戦争へ向かう動きに対して「自分がブレーキをかけられるように何でもできることをやっていこうというのは、今の自分の中にある」と、活動の原点について教えてく

れた。

平和のために、憎しみ合うような関係を作らず、戦争へ向かおうとする動きには声を上げて反対していかななくてはいけない。そのひとつに大久野島での活動がある。「大久野島の加害の歴史が知らされていないことは、中国の人に対しても大変失礼なことである」から、「この歴史は誰かが伝えていかないかんし、伝えていく義務」があるというのだ。そして「まず自分がやらないかん」と、活動を続けている。

山内さんは「間違った歴史について教えていた」ことに気が付いたことをきっかけに、大久野島の毒ガス問題という環状島の〈外斜面〉を登り始めた。そして自ら現地に足を運んだり、中国の体験者に話を聞いたりして、〈内斜面〉の声に耳を傾けながら〈外斜面〉のさらに高いところへと登っていった。現地や体験者から得た気付きは、〈外斜面〉から〈外海〉に向けて大久野島や体験者の存在を伝える活動の力にもなった。

〈内斜面〉にいる体験者と交流しながら、山内さん自身は〈外斜面〉を

登った。そして体験者の存在を〈外海〉に伝えようとしたのだ。

### 第3節：私たちは非当事者じゃない

山内さんが今でも熱心に取り組み続ける根底には、平和のために伝えていく義務があることに加えて、強烈な当事者意識があった。自分は毒ガス問題の体験者ではないとしながら、「私たちが日本に住んでいて、この世界に住んでいて、関係無いことないんですよ。日本国民である以上は、日本がやったことについては当事者なんです」と、繰り返し熱弁する。自分が殺したわけではないし、自分が中国に行って謝罪をしなければいけない、ということではない、と前置きをして、このように語ってくれた。「毒ガスの加害を知ることは日本国民として当然だし」、「日本の加害を受けた国

とか、世界に対しても、日本は本当に申し訳ないことをしたと。もうこんなことは二度とさせない日本にする義務は、私たちにあると思うんですよ」。

大久野島の毒ガス問題は、そもそも知らない人も多く、知っていても遠い昔の出来事だと認識されがちである。自分が直接被害や加害を経験しておらず、体験者ではないから関係ないと思われるかもしれない。しかし「そうではない」と山内さんは断言する。「毒ガスを使ったという責任は、私たちに直接的にはないけど、それをまた繰り返すような国にはいけないというのは、国民私たち一人ひとりとして、非当事者じゃない、あくまで日本国民なんだから、関係者なんですよ」、「日本政府が毒ガス被害者に対して、賠償も謝罪もしてないんだから、日本政府がやらなかったら、それは本当に申し訳ないという気持ちを持つことはあってもいいと思うんですよ」。二度と同じことを繰り返さないために、日本国民という当事者である以上、大久野島の毒ガス問題の存在を知ることが、必要なのだという。その信念のもと、山内さんは大久野島の毒ガス問題を伝える活動を続けているのだ。

活動を始めて約25年経った今、山内さんの話を「いっぺん聞いて、はい分かったということはないと思うんですよ」と、伝える難しさを滲ませながら、同時に「それで良いと思う」とも語る。「話を聞いた人が、戦争言うたら原爆じゃ空襲を受けたじゃということばかりが頭にあったけど、大久野島に行って勉強して山内さんの話聞いて、それだけじゃないんだと。逆に日本がああ島で毒ガスを作って外国人殺したんだということを初めて知ったと。それだけでもね、やっぱりその記憶の中には残ると思うんですよ」。大久野島の歴史の

全てを理解しなくても、何かしらが印象に残っていればいいのだという。「何もそういう事実を伝えてもらえてないということは、その人にとっては大変やっぱり不幸なことだし、良くないことから。やっぱり出来るだけ伝えていきたいっていうのは今の活動に繋がってるよね」と言って、山内さんは朗らかに笑った。

体験者ではない山内さんは、〈外斜面〉にいらながらも、当事者意識を持ち活動していた。〈外斜面〉や〈外海〉にいる体験のない人も、日本が行ったことだから当事者であり、知ることが必要だと考え、取り組んでいた。自分自身が体験者と会って学ぶだけでなく、〈外海〉に向けて体験者と大久野島の問題を広める役割を担ってきた。〈外斜面〉に登る人を増やすことや、〈内海〉や〈内斜面〉にいる人への賠償や謝罪が必要だと感じ、その一歩として、大久野島の毒ガス問題という環状島の存在を〈外海〉に知らせよう、と山内さんは遺跡案内や講和という活動を続けているのである。

第2章では大久野島の遺跡案内や講和をされている山内さんの取り組みに注目して、〈外斜面〉を登って〈内斜面〉にいる人と話しながら、同時に〈外海〉へと呼びかける活動について見てきた。第3章では、記録者であり支援者でもあるという、複数の立場で原爆小頭症の問題と関わり続けている人に注目する。

### 第3章：体験者と関わる存在意義に

#### 第1節：記録と支援を両立する

「もし小頭症の人たちと関わってなかったら、僕はどうなってたんだろうっていう風に不安になります。人生は一体なんだっただろうって」<sup>5</sup>、「関わっていくこと自体が、自分としてのアイデンティティになっていったという、そんな感じが

5. 2023年10月1日、平尾直政さん、Zoomにてインタビュー。以下、平尾さんへのインタビューは同日に行ったものである。



もしれないですね」。そう語ってくれたのは、原爆小頭症被爆者と家族の会である「きのこ会」の事務局長を務めている平尾直政さんだ。

原爆小頭症とは、「母親の胎内で被爆し、強力な放射線を浴びたことが原因で発症する原爆後障害のひとつ」（きのこ会、2023）である。その症名のとおり、「頭が小さいことなどが特徴で、多くが脳と身体に障害を負って」（きのこ会、2023）いる。

平尾さんが原爆小頭症の人たちのことを知ったのは、本を読んだことがきっかけだった。報道のカメラマン3年目だった平尾さんは、本を読んで「これはちゃんと伝えなきゃいけない話なんじゃないか」と思い、会社の先輩に「なぜ取材をしないんですか？ したほうがいいんじゃないですか？」と直訴する。しかし先輩は、「気になるなら自分で取材しろ」という反応だった。そこで「じゃあ仕方がないなあ」と、性能が悪い大きなカメラを持って、先輩の手伝いを受けながら、1991年に平尾さんは1時間の番組を完成させた。

報道の仕事は「何かのテーマを取材したらそれで終わり」で、また何か新しいテーマを取材するのが普通」だという。しかし平尾さんは、「どうもその関わっていったその取材対象者の人が気になって、休みの時に訪ねていったりとか、コンタクトを取ったり」していた。そのときはまだ、深い思いがあったわけではなく、なんとなく気になって撮っていただけだそう。支援に関わろうという思いもなく、私物のカメラを持って時々撮影をして、と繰り返していた。ちょうど最初に取材をしてから5年後の1996年に50歳の誕生会が開催され、そのときの映像を重ねて2本目の番組を作ったのだ。

その50歳の誕生会のとき、平尾さんの会社の大先輩であり、きのこ会を作って事務局長をしていた、秋信利彦に頼まれたことがあったという。「ただ親御さんが倒れたりして、会に出席できない人

がいるんだ。その人の様子とメッセージを撮ってきてほしい。それを会場で上映したい」。頼みを承諾した平尾さんは、2人の小頭症の方の元を訪ね、撮影をし、こっそり会社で編集して上映をした。「それが結構、支援のきっかけになったかな、という風には思います」と平尾さんは振り返った。

50歳の誕生会のときに、医療ソーシャルワーカーの方から、「もう親御さんたちが倒れていって、親御さんたちだけでそういう会を運営するのは難しくなっている。思いのある市民たちが協力しながら支えることが必要なんじゃないか」、「きのこ会を支える集まりみたいなものを作りませんか」と提案があった。誕生会の終わりに、福祉の担当者や役場の福祉関係の担当者、取材者などが参加し、きのこ会を支える会が立ち上がった。平尾さんも下っ端のメンバーとして参加することになったのだ。

しかしその時は、積極的に支援に関わろうと思っていただけではなかった。支える会で行われる勉強会などに参加しなかったのだ。「最初からボランティアとして、とか、支えなくちゃ、っていう風な思いが強くて関わったわけではない」という。支援者としてではなく、「いろんな情報に迫りたいっていう、そういう取材者としての欲のところがあったことは否めない」と、平尾さんは苦笑した。「基本的にきのこ会の人たちって取材NGなので、取材ができる人っていうのは非常に限られていて。そういう中で実際にカメラは回せないにしても、こういう状況があるんだってことについては知りたいという取材者としての欲の方が勝って関わって」いったそう。

取材者としての欲、そして知りたいという欲できのこ会に関わり始めた平尾さんだったが、いろいろなことを知っていくうちに「これはいかんぞ。ちゃんと支えるところは支えていかなくちゃいけないぞ」と思うようになった。そこから、「家庭用のホームビデオを持ってそれぞれの方たちのと

ころを訪ねてお話を聞いたりして、それを収録しながらサポートできるところはサポートしていくっていう、そういう関係が始まっていった」のだ。その関係を続けるうちに、平尾さんの気持ちは段々と支援のほうに傾いていった。「知れば知るほど、ちゃんとこの方たちのことはサポートしないといけないし、この方たちのことを記録に残していないと、この人たちの存在、この人たちの苦しみがないことになっていってしまう」。記録者と支援者という2つの立場で関わり始めることとなる。

しかし、「本当に支援をしなくちゃいけないっていうときにカメラを回すっていう、そういう行為について、自分の中ですごく苦しい思いを持つようになって」いったという。困っている状況で手を差し伸べるべきなのか。でも記録に残さなければ、体験者たちの苦しい状況は他の人に伝わらない。

そこで平尾さんは、カメラは回して、支援もするという方法を選択した。カメラは持つだけでファインダーは覗かない、というスタイルだ。この方法を実際に行っている様子が、映像として公開されている。RCCテレビで2020年に放送された、『おーい、聴こえますか？ 被爆75年・ヒロシマから』というドキュメンタリー番組の1シーンである。

原爆小頭症の川下ヒロエさんは、母親と一緒に暮らしていた。その母親が病気になって亡くなった、という情報を受けた平尾さんが病院に駆けつけた場面だ。母親が亡くなって戸惑っているヒロエさんに寄り添いながら、電話がかかってきたら教えたり、葬儀会場の段取りをしたりと支援をしている。同時に、手元にビデオカメラを持っている。支えていかななくてはいけない状況があるなかで、母と子の病院での最後の時間を記録として残しているのだ。「それまで母一人子一人ですずっと生活をしていて、これから一人になっていく彼女

の様子っていうものは、文字でいくら書いてもなかなか伝わりにくいところがあるかもしれないけども、映像であればその情感も含めて伝えることはできるんじゃないか、っていう風に思いながら記録をしてるっていうのを積み重ねてる感じ」。支援をしたいという気持ちがありながらも、記録をすることの必要性を平尾さんが感じているからこそ、支援と記録の両方を選択したのだ。

平尾さんは自身の知りたいという欲から支援に関わるようになった。〈外海〉から見えた環状島に興味を惹かれ、自らの意思で〈外斜面〉に登り始めたのだ。そして支援者として〈外斜面〉に登っていくうちに、体験者の存在や苦しみをなかったことにしないために、記録をしていかななくてはならないと思い始めた。それは〈外海〉の人たちや、今だけでなく、将来〈外斜面〉に登ってくるであろう人、あるいは〈内海〉にいて存在に気付かれていない人が、見るかもしれないものなのだ。

## 第2節：「未来に繋がる記録」

記録者と支援者という、2つの立場で〈外斜面〉に登り始めた平尾さんだったが、何度も「辞めようかな」、「逃げようかな」と思ったという。そう思った出来事の1つとして、「僕は当事者家族に土下座したことがあります」と教えてくれた。

小頭症の人の親御さんが亡くなり、その葬儀の様子を平尾さんが取材した。その小頭症の人は取材をずっと断っていたが、亡くなった親御さんがきのこ会の会長を務めていたことから、記録として撮影することを快く許可してくれたという。

その数年後にラジオ番組のなかで、そのときの葬儀の音声を使って放送をした。それを聞いたご家族から、「静かにめちゃくちゃ怒られた」のだ。「マスコミの人は1度心を許すと、床の間までズカズカと上がってくるから気をつけなさいよ、と母に言われていました。本当ですね」と、ご家族はお詫びのために訪れた平尾さんに言った。その言

葉が「胸に刺さってしまって」、「返す言葉が無くて、本当に申し訳ありませんでしたって土下座をして」謝った。

「私たちは撮影は許しました。でもそれを伝えることまで許した記憶はありません」。平尾さんとしては、「撮影記録=伝える、という認識でいたけれど、別物なんだっていうのはその時に思い知らされた」のだ。

この出来事だけではなく、似たようなことは何度もあったが、平尾さんは「本当にこのテーマに関わっていいんだろうか」と何度も思う、と語る。「当事者にとって何が1番大切なのか、何が1番きついのか」ということを、何度も失敗を繰り返しながらちゃんと理解をしていく。しかし「何よりも辛いのは、理解をしているっていう風に思っている人から、一方的に何かをされること」ということも学ぶ。そのなかで、「自分を奮い立たせるためにはどうしたらいいのか？っていうのは、何度も何度も考えて、本当に辞めようかな、とか逃げようかな、と思ったことも確かに1度や2度じゃない」と、平尾さんは振り返った。「だってやらないのが1番楽ですからね。関わらないっていうのが1番楽な方法だけども」としたうえで、平尾さんは離れなかった理由についてこう語ってくれた。「やはりこれはもう自分の欲。記録したい、残しておかないといけない。このまま何もなかったら、この人たちのことがいないことになってしまう」。

記録を残していかなければ、体験者が全員亡くなった段階で何も伝えられるものが無くなってしまふ、と平尾さんは危惧していた。支援者として、体験者である小頭症の人たちを支えたり、福祉に繋げたりしていくことはできる。同時に、記録者としてかれらに関わって残していこうとしているのだ。

平尾さんは、「確固とした信念を持って動けるかっていうとそうじゃなくて、本当に揺れなが

ら、ずっと今までここまで来ているっていう、そんな感じですね」と振り返る。そのうえで、「今ちゃんと言えることっていうのは、公開、非公開は別にして、原爆小頭症の方々、広島・長崎に原子爆弾が投下されたあと、どういうことが戦後起こったのか。どういう生活を送ることになったのか。そこにどういうトラブルがあったのか、とか。この方々が最終的にどうお亡くなりになったのかっていう。そういう記録を残しておくことが、僕に与えられた使命なんじゃないかなっていう風に思ってるんですよ」と笑顔で話してくれた。そして、(記録を)「残すことによって、あとにそれを目にする人が、何らかのアクションを起こすきっかけになったりとか、そういう基礎情報、基礎データとして使ってもらえることができれば、っていうのを思っている」と語る。記録を残すことは、あとに続く人たちのための行為でもあるのだ。

「未来に繋がる記録」と、平尾さんは表現する。「本当に過去になにが起こったのか、その後になにが起こったのか」を記録し、心に留めておかなければ、「同じ過ちを人間は必ず起こしてしまうに違いないと私は思ってる」と、警鐘を鳴らす。そしてその警鐘は、平尾さん自身にも向いているという。「声を一人ひとりが上げない限り、それは誰にも届かない。少なくとも自分が声を上げることによって、それが誰かに繋がっていった、他の人も声を上げてっていう風なことが繋がっていくと、少なからず何らかの影響が起こるに違いない。というか、起こって欲しいって想いもある」。そのために、今のことを記録に残し、過去にあったことを掘り起こしてまとめていく作業が、とても大切なのだと語ってくれた。

〈外斜面〉にいた平尾さんは、決してずっと登り続けていた訳ではなかった。体験者との関わりによって、登ることを辞めようと思ったことすらあったという。しかし、体験者の人生を記録して残すことが、自分自身に与えられた使命なのだと

感じていた。そして、平尾さんが〈外斜面〉で声を上げることで、〈外斜面〉や〈外海〉に影響が起ることを期待しているのだ。

### 第3節：人と人との出会いとして

記録者と支援者という立場で原爆小頭症の方々と関わってきた平尾さんだが、体験者と関係性は近くなりながらも「最終的にはやはり当事者にはなり得ない」と語る。「そこにはやっぱり大きな壁があるのは、それは仕方がないこと」だという。そのうえで、支援をするときはできる限り寄り添い、ときに冷静さも持ちつつ、将来を考えて関わっていくことが大切だと教えてくれた。

一方で、記録をする立場のときは「ある意味冷静にならないといけない」というのだ。記憶が曖昧だったり、無意識に自分を正当化するための嘘を言うこともある。それらを踏まえながら、冷静に見極める必要があるのだ。

平尾さんは、支援をするときの目線の「ウェットな目線」と、記録をするときの「ドライな目線」を両方持ち合わせながら関わるのが重要だと繰り返した。「本当に難しい。非常に難しい。それで本当にずーっと悩んでいます。未だに答えは出ません」と苦笑しながら、「大切なのは、芯として自分は一体何をしたいのか、っていうのを、ちゃんと自分の中でぶれないように持っておくことかな」と語った。

今の平尾さんにとってその芯は、支援者として「小頭症の当事者の人たちが、安心して苦しむことなく、生活をしてもらえるようにしていく」、「苦しむことなく、人生の最終盤を過ごしていただく」ことだそう。今は支援者として、「かれらが安心して生活できるように」ということを最優先に考えたいという。記録者としては、キーパーソンの多くが既に亡くなっていることから、過去の記録を掘り起こしてまとめる作業は、「当事者たちがみんなお亡くなりになった後でも、やろうと思

えばできることなのかな」とし、まずは原爆小頭症の方々の残りの人生を第一に考えていることが伺えた。

体験者に対して、平尾さんは終始「させていただく」という言い方をしていた。体験者と関わり続けていいのか悩んだり、支援をしたり、記録をしたり、側から見れば決して真っ直ぐ突き進んできたわけではないようにも捉えられる平尾さんだが、「やらせてもらってる」というスタンスはずっと変わらない。誰かからやれと言われて「何々をしてあげてる」のではない。「自分がやりたいっていう、そういう気持ちに正直に動いてる」のだという。だからこそ、今でも関わりが続いていて、原爆小頭症の方々と「関わっていくこと自体が、自分としてのアイデンティティになっていった」のだ。

そう感じるまでに至ったのは、平尾さんが体験者たちの中に入っていったからこそである。「良いところだけではなくて、かれらの人に言えないような駄目なところもたくさん見てきました。そのうえで、ずっと関わっていきたいという風に思えるようになった」という。そして、それは「人と人との出会いの大切なところじゃないかな」と続ける。「これはもう、原爆の話とか核の問題とかっていう小さな話だけじゃなくて、一人対一人、人間対人間のそういうところが、やっぱり原点にあるのかなっていう気持ちはしますけどね」と、にこやかに笑った。

平尾さんは〈外斜面〉に立ちながら、記録者と支援者という2つの立場を通して、環状島の内側と外側の双方にアプローチしていた。支援者として体験者を支えつつも、かれらの存在や人生を記録した。支援者と記録者という一見別物にみえる2つだが、平尾さんはどちらも同時に行うことを選んだ。その根本には、〈外斜面〉を自分の欲で登っているということ、そして体験者に何かを「させていただく」という感覚がある。その結果、環状



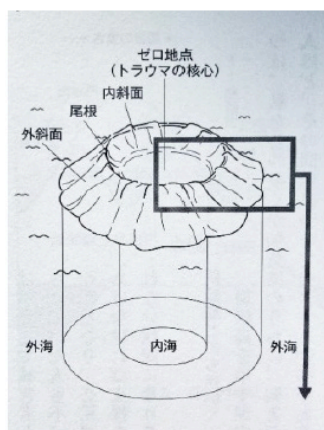


図1 (277頁再掲) 環状島モデルの構造

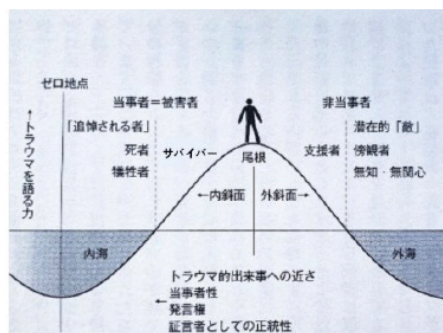


図2 (277頁再掲) 環状島モデルの断面図

(宮地尚子、2011、『震災トラウマと復興ストレス』岩波ブックレットより、一部筆者改変)

島の〈外斜面〉を登っていること自体が、平尾さんのアイデンティティになるまでに至ったのだ。

## 終章：社会を変える可能性を求めて

### 第1節：ともに〈外斜面〉を登る

必ずしも体験者ではない人が、体験者どう出合い、いかに深く関わるに至ったのか、環状島モデルでいう〈外斜面〉にいる3人を通して見てきた(図2参照)。中川重徳さん、山内正之さん、平尾直政さんの3人に、本論文でインタビューを重ねた。かれらにとってセクシュアルマイノリティや大久野島の毒ガス、あるいは原爆小頭症とは、関わらなくても生きていけることだ。でありながら、積極的に関わる道を3人は選んだ。弁護士や遺跡案内、支援者や記録者という形で、現在まで問題と関わり続け、体験者と関係性を結んでいる。

図2の環状島モデルを用いて、必ずしも体験者ではない人が〈外海〉から〈尾根〉に向かって問題と深く関わって〈外斜面〉を登ってきた過程に、この論文は迫ってきた。中川さん、山内さん、平尾さんの3人はいずれも問題と深く関わり、体験者すなわち〈サバイバー〉と関係性を結んできた。だがそこには体験の有無という大きな壁が、体験

者と非体験者のあいだに存在していた。

セクシュアルマイノリティではないが弁護士という立場で同性愛者の権利を守る裁判に奮闘している中川さんは、セクシュアルマイノリティとして生きる原告とどれだけ対話を重ねても、かれらはその体験を持たない我々に対して、『『全ては分かってくれてない』という感覚を持っている』と話す。母親のお腹のなかで被爆した胎児被爆者のなかで、知的障害がある原爆小頭症の方のことを知ってもらおうと支援しながらドキュメンタリーを撮り続ける平尾さんは、胎児被爆者やその家族と体験を持つ人たちとのあいだに「大きな壁があるのは、それは仕方がないこと」とも話していた。体験者では無い人は、どれだけ関係を深めても体験者と全く同じ地平に立つことはできない。

図2の環状島モデルの断面図でいう〈尾根〉の部分に注目すると、体験者と非体験者のそのあいだは、より明確に見えてくる。環状島は体験者と非体験者が全く同じ場所にいるのではなく、体験がある内側と、体験のない外側という違いで分けられている。

だが、体験者と非体験者のそのあいだは分断されているわけではない。同性愛者の権利を守る裁判に奮闘する中川さんは、セクシュアルマイノリ

ティ当事者という体験者を、どこかで自分と繋がっている地続きの人々だと感じていた。毒ガスにまつわる遺跡案内は講和を続ける山内さんには、毒ガスを使用したり、その被害を受けたりした経験は自らにはない。しかし毒ガスの使用は日本がしたことだから日本国民である以上無関係ではなく、私たちは皆当事者であり、体験者と体験の無い自分たちは繋がっていると、山内さんは熱く語る。原爆小頭症被爆者と家族の会である「きのこ会」の事務局長を務める平尾さんは、体験者と「人と人との出会い」を重ねて関わっていた。体験者を決して「かわいそう」な人とは平尾さんは見ていない。

図2の環状島モデルを用いると、体験者は〈内斜面〉、非体験者は〈外斜面〉にいるが、同時に同じ環状島に立っていることが見えてこよう。体験者と非体験者のそのあいだには体験の差が歴然としてある。が、同時に、体験者と非体験者は地続きで繋がっている存在なのだ。体験者と非体験者のそのあいだは、他者として二分に分離することはできないのである。

体験者と深く関わり〈外斜面〉を登ってきた中川さん、山内さん、平尾さんの3人は、ではどうやって体験者と繋がろうとしたのだろうか。そこに至るまでの過程は多様であり、問題といかに出会い、いかに深く関わり、体験者といかに関係性を結んできたのか、その道筋は決してひとつではない。

中川さんは友人であるナガノさんら「アカー」のメンバーである体験者と一緒に活動をしていくことに充実感を覚えたり、自分と同じように〈外斜面〉を登っているといえるアメリカの弁護士と出会ったりするなかで、より問題と深く関わり、〈尾根〉に向かって〈外斜面〉を登っていった。山内さんは直接毒ガス被害者と家族ぐるみで何度も交流する機会を作りながら、同時に毒ガスの遺跡案内や講和を地道に続ける。平尾さんは支援者

として原爆小頭症の人とその家族を支えるとともに、記録者としてその人たちの人生を記録し、〈外海〉や〈外斜面〉にいる人たちに伝えてきた。

中川さん、山内さん、平尾さんはそれぞれの方法や役割を通して、体験者と関係性を結んできた。かれらは、決して一人きりで問題と関わってきたわけではないのである。

## 第2節：過去との繋がり

中川さん、山内さん、平尾さんの3人が問題と関わり始めるよりも前に、問題に気が付いて取り組んできた先達の人たちがいる。3人が登ってきた〈外斜面〉の足元には、それよりも前に〈外斜面〉を登ってきた人々の足跡があった。先達と直接会ったり、シンポジウムで登壇していたり、先達の本を読んだり、その方法は多様である。かれらは一人きりではなく、先達の経験や蓄積に学びながら、問題と関わり〈外斜面〉を登っていたのだ。

中川さん、山内さん、平尾さんは現在声を上げている〈内斜面〉のサバイバーだけでなく、今は亡きサバイバーとも関係性を結んでいた。例えば、セクシュアルマイノリティの人への差別や偏見により自殺をしてしまった人や、差別や偏見に晒されたまま病により亡くなってしまった人がいる。また、毒ガスの被害者や原爆小頭症の人の多くは亡くなっている。3人は過去に声を上げていたサバイバーたちとも、直接会ったり、あるいは会わなくとも、本や映像を通じて出会っていたのだ。今は亡きサバイバーたちが動いてきたからこそ、その蓄積のうえに3人は問題を知り、現在の活動をするに至ったのだ。

3人と過去との繋がりとは、環状島モデルだけでは必ずしも捉えられない。従来の環状島モデルに加えて、現在と過去という時間の視点も必要である。

### 第3節：未来との繋がり

中川さん、山内さん、平尾さんの3人が関係性を結んできたのは、現在と過去だけではない。かれらが社会問題と深く関わり、体験者と関係性を結びながら登ってきた〈外斜面〉の先には、これから〈外斜面〉に登ってくる人たちがいる。

3人が〈外斜面〉を登る姿は〈外海〉に反射し、カミングアウトが難しいセクシュアルマイノリティの人や、中国にいる毒ガス被害者、メディアに出られない原爆小頭症の人の存在を今後可視化していく可能性を拓くことが出来る。さらには、今〈外海〉にいて、その社会問題を遠い存在だと感じている人が、将来かれらが登った足跡に気が付いて、それを辿って登り始める種まきでもあるかもしれない。

さらにかれらが問題と関わってきた経験、すなわち〈外海〉から〈外斜面〉を登ってきた軌跡は、必ずしも体験があるわけではない人たちが、いかにして問題と関わり、いったい何ができるのか、非体験者のひとつのロールモデルになるのだ。問題と出会い、体験者と関係性を築きながら、かれらが主体的に行ってきたことは、これからの未来を生きる人たちのためでもあり、さながら灯台のように未来に対する道標を残す行為である。

またかれらの行動や記録は、二度と同じような苦しい目に遭う人が出ないように、という未来を見据えた警鐘でもあり、未来に向けてより良い社会を築く礎となるものでもある。中川さんは裁判を通してセクシュアルマイノリティ当事者への偏見を減らすとともに、新しい人権を確立していこうとしていた。山内さんは大久野島の毒ガスにまつわる遺跡を案内し、語り続けることで、大久野島の毒ガス遺跡の存在や、日本が戦争で毒ガスを使用する加害行為を行った歴史を継承するとともに、繰り返してはならないとの未来に向けた警鐘を鳴らしていた。平尾さんは、次の世代に広島原爆は何をもたらしたのか、小頭症の人た

ちの存在と生き様を、未来を見据えて記録している。

非体験者が体験者と関係性を結び、問題に取り組むとは、今を生きる非体験者だけでなく、未来の体験者と非体験者、さらに未来の社会とも繋がっているのだ。

これを環状島モデルに置き換えたとき、未来という時間軸は表現できない。過去に問題に取り組んできた人を表せないように、未来の人や社会の存在もまた環状島モデルでは十分に表しきれないのである。

### 第4節：体験者と非体験者のあいだで生きる

本論文では、必ずしも体験者ではない3人がどのように体験者と関係性を結び、問題と関わってきたのかを、環状島モデルを用いて論じてきた。必ずしも体験者ではない3人は、主体的に体験者と関わり、声を聴き、記録し、活動してきた。かれらの存在は、過去や現在、そして未来で問題と関わる人々を繋げる役割を担っている。さらには、〈内斜面〉や〈外海〉にいる人のあいだに立ち、繋げる役割も同時に担っている。非体験者だからこそ、時間軸を超えて体験者と非体験者のあいだに立ち、橋渡しができるのだ。体験が無くとも社会を変えることは可能であるし、3人のような社会問題の周縁にいる人の存在は、社会を変えていくために決定的に重要なのだ。

社会問題の体験者について論じることは頻繁にされてきたが、あえて〈外斜面〉に位置する非体験者に注目することで、体験者だけに注目しているときには見えてこなかった、体験者と非体験者の繋がりを明らかにすることが出来た。

この論文は環状島モデルが持つ有益性と限界を示すことも出来た。環状島モデルを用いて非体験者について論じることで、社会問題を取り巻く人たちの位置づけが明確になった。一方で、非体験者と体験者を考察するうえで、環状島モデルでは

過去や未来との繋がりという時間軸は表しきれないことも明白となった。

しかし課題も多く残されている。体験者からも話を聞いたり、非体験者とともに活動をしたりして、その活動が及ぼす影響についてより深く考察していく必要があろう。さらには体験者と非体験者の繋がりを明らかにするうえで、環状島モデルの限界は示したが、新たなモデルを構築するまで至らなかった。

過去のフィールドワーク等を通して、体験者の語りばかりに頼る場面に多く遭遇してきた。なぜ声を上げる前から差別や偏見、苦しみに晒されてきた体験者たちばかりを矢面に立たせるのかとても不思議だった。本論文で、必ずしも体験者ではないが、社会問題と深く関わり、主体的に行動している3人に話を聞いたことで、改めて体験者の語りの重要さや、非体験者だからこそ担える役割が分かった。非体験者として社会問題と対峙したときに何ができるのか、その可能性が大きく広がったと思う。

本論文を通して、体験者にばかり依拠せずに社会を変える様々な方法が模索され、実施されることを願っている。また、必ずしも体験者ではなかったとしても、社会を変えるために一歩踏み出す人が一人でも増えれば、より良い社会になっていくであろうし、その実践こそが本論文の意義といえる。参考資料一覧

#### 〈フィールドワーク・インタビュー〉

2021年7月3日 【出張授業】LGBTQ+出張授業IN金沢への参加。

2022年11月30日 WeWork城山トラストタワーで「結婚の自由をすべての人に」訴訟東京地裁判決報告会に参加。

2023年8月25日 広島市平和記念公園レストハウスにて平尾直政さんへのインタビュー。

2023年9月18日 大久野島で山内正之さんの遺跡案内へ

の参加。

2023年10月1日 Zoomにて平尾直政さんへのインタビュー。

2023年10月2日 Zoomにて山内正之さんへのインタビュー。

2023年11月6日 諏訪の森法律事務所にて中川重徳さんへのインタビュー。

#### 〈参考文献〉

神谷悠一、2022、『差別は思いやりでは解決しない ジェンダーやLGBTQから考える』集英社。

キムジヘ、2021、『差別はたいてい悪意のない人がする』大月書店。

谷口洋幸、中川重徳、風間孝、三橋順子、鈴木秀洋、石田京子、東由紀、石田若菜、長島佐恵子、2019、『LGBTをめぐる法と社会』日本加除出版。

広岡守穂、山本千晶、吉田洋子、近藤真司、谷岡慎一、川崎あや、和田佐英子、上村英明、神子島健、暉峻僚三、2019、『社会が変わるとはどういうことか?』有信堂。

宮内洋、熊田陽子、鶴田幸恵、西城戸誠、松宮朝、樋口直人、中根成寿、天田城介、石田佐恵子、好井裕明、『〈当事者〉をめぐる社会学—調査での出会いを通して』北大路書房。

宮地尚子、2011、『震災トラウマと復興ストレス』岩波ブックレット。

山内正之、2020、『大久野島の歴史 三度も戦争に利用され 地図から消された島 毒ガス被害・加害の歴史』大久野島から平和と環境を考える会。

#### 〈参考ウェブサイト〉

2020、「おーい、聴こえますか? 被爆75年・ヒロシマから」、RCCテレビ、(2023年8月24日アクセス <https://iraw.rcc.jp/play/videos/606610>)。

2022、「弁護士のご紹介」、諏訪の森法律事務所、(2023年10月1日アクセス <https://www.ne.jp/asahi/law/suwanomori/profile/profile.html>)。



2023、「一人ひとりの想いを掛け算して、大きな力に。」、

特定非営利法人ASTA、(2023年11月20日アクセス

<https://asta.themedia.jp/pages/918254/about>)。

2023、「同性婚裁判で判決…福岡地裁は“違憲状態”と

判断」、福岡・佐賀KBC、(2023年12月1日アクセス

[https://youtu.be/yceCgTDE6Ow?si=a1fmdVrLEl5k\\_f6j](https://youtu.be/yceCgTDE6Ow?si=a1fmdVrLEl5k_f6j))。

2023、大久野島から平和と環境を考える会、(2023年9月

18日アクセス <http://dokugas.server-shared.com/>)。

2023、きのこ会(原爆小頭症被爆者と家族の会)、(2023年

8月24日アクセス <https://sites.google.com/view/kinokokai/>)。

kinokokai/)。